

平成27年度 第6回足立区総合教育会議 議事録

会 議 名	平成２７年度 第６回足立区総合教育会議				
開催年月日	平成２７年１０月２９日（木）				
開催場所	足立区役所８階 特別会議室				
開催時間	午後３時開会				
構 成 員 及び出欠	区長 近藤 やよい	出席	教育長 定野 司	出席	
	教育委員(教育長職務代理) 小川 正人	出席	教育委員 桑原 勉	出席	
	教育委員 花岡 恵三	出席	教育委員 小川 清美	出席	
関係職員	地域のちから推進部長 井元 浩平		産業経済部長 石居 聡		
	福祉部長 橋本 弘		教育次長 山本 聖志		
	学校教育部長 宮本 博之		子ども家庭部長 伊藤 良久		
	生涯学習振興公社事務局長 永井 章子		政策経営課長 中村 明慶		
	子どもの貧困対策担当課長 橋本 忠幸		総務課長 鳥山 高章		
	秘書課長 高橋 俊哉		地域文化課長 浅見 信昭		
	教育政策課長 杉岡 淳子		教育指導室長 浮津 健史		
事 務 局	政策経営部 政策経営課 経営戦略担当 佐藤 雅憲 経営戦略担当 甲斐 貴大 学校教育部 教育政策課 教育政策担当 楠山 慶之				
会議に付した 議題	１ 教育大綱の文面及び構成（案）について ２ 足立区学力調査における中学校の学力分析について				

第6回足立区総合教育会議

日 時 平成27年10月29日（木）午後3時開会

場 所 足立区役所8階 特別会議室

○中村政策経営課長

それでは、皆様おそろいですので、ただいまより平成27年度第6回足立区総合教育会議を開催させていただきます。

私、本日、進行を務めさせていただきます政策経営課長の中村でございます。よろしくお願いいたしますします。

まず最初に、本会議の運営につきましてご説明をさせていただきます。本会議は公開を原則といたしまして、会議記録につきましては、ホームページ等で公開させていただいております。また、会議録作成のために、皆様のご発言は録音させていただいておりますので、ご了承ください。それでは、議事に入らせていただきます前に、お配りした資料について確認をさせていただきます。

まず、1枚目が本日の次第でございます。次第の後ろに、出席名簿、それから座席表を添付させていただいております。

続きまして、資料1が、教育大綱（案）に対する関係団体から寄せられた意見で、A4、1枚でございます。

資料2が、足立区教育大綱（案）で、A3、2つ折りになっているものでございます。

資料3が、大綱理念実現に向けた施策体系についてで、これもA3、2つ折りになってございます。

資料4が、足立区学力調査における中学校の学力分析というホチキスどめの資料でございます。

資料5が、総合教育会議の事務日程（案）でございます。

さらに、第4回、第5回の議事録、そして、学力調査の中学校2年生の数学と中学校2年、3年の英語を参考資料として席上に置かせていただいておりますので、ご確認ください。

資料は以上となりますので、以降の議事につきましては、区長、よろしくお願いいたしますします。

○近藤区長

それでは、前回までの皆様方のご意見を踏まえまして、教育大綱（案）の内容をさらに議論していただき、できれば今回の会議において、大綱の文面及び構成を確定していきたいと思っております。また、次回の会議におきましては、デザインも含めた最終案を議論の上、確定させ、この12月にはパブリックコメントをかけて、区民の皆様のご意見も伺っていく予定でございます。

1. 教育大綱の文面及び構成（案）について

○近藤区長

それでは、議事の1、教育大綱の文面及び構成（案）について審議をしたいと思います。お手元に

ございます資料1から3につきまして、事務局から説明をさせていただきます。

○中村政策経営課長

それでは、私から、資料1から3につきましてご説明をした上で、1つ提案をさせていただきます。

まず、資料1をご覧ください。既に第4回、第5回の総合教育会議で意見をいただいた主だった項目をまとめさせていただいております。また、裏面の3につきましては、開かれた学校づくり協議会からいただいた意見をまとめさせていただいている資料となっております。内容につきましてはご覧いただければと思いますけれども、主だったところだけ申し上げますと、まず、第4回総合教育会議におきまして、青少年期のご意見を賜りました。その中で、既に案として作成していたものに対するご意見といたしまして、例えば一番上に小中高の連携がございますけれども、こういったものを教育大綱の中に盛り込んだらというご意見、そのほか、1つ飛びまして、親の再教育が必要なのではないか、下から4つ目に、体力の強化を文言として入れたらどうか、下から2番目に、子どもに対する親になったときの教育も必要なのではないかというご意見を賜っております。

第5回総合教育会議は、乳幼児期と成人期それぞれからご意見を頂戴しておりますけれども、例えば乳幼児期におきましては、子育てに対する知識不足、社会からの孤立という問題があるのではないかと、2つ目の、正社員以外の働き方に対応できる保育制度の必要性ということが意見として出されておりました。また、成人期につきましては、異世代交流の場を提供したらどうかと、2つ目にあります学校と地域資源、例えば企業、大学、各種施設との連携した事業の取り組みなどのご提案をいただいたところでございます。

裏面でございますけれども、開かれた学校づくり協議会からの意見といたしまして、大理念は、資料2の1枚目の理念の部分にございますけれども、「自己効力感」という記述に対して、「自己肯定感」という言葉のほうがわかりやすいのではないかとというご意見、また、乳幼児期につきましては、乳幼児への虐待を防ぐために、父母その他の保護者が我が子に対して限らない愛情を持って接しながら家庭教育力を高めるという文言を加えてほしいというご意見、また、第5回の乳幼児期のときにも意見がありましたが、親に向けた教育というご意見を賜っております。また、青少年期につきましては、一番上にあります他人への思いやりの心の文言を加えてほしいですとか、そのほか、学校、家庭、地域の連携、小中高の位置づけの明確化など、重なったご意見を頂戴しているところでございます。成人期につきましては、1番目にあります地域社会の支え手になるまでに地域がどのように育てるかですとか、地元の小中学校の支援等を通じて地域貢献できる仕組みづくり、また、区内大学で学んでいる大学生の力を足立の教育に生かしてほしいというご意見も開かれた学校づく

り協議会からいただいているところでございます。

この資料を踏まえまして、資料2の教育大綱（案）に一部ご意見を盛り込ませていただいたところでございます。例えば、足立区教育大綱（案）と見出しのある下でございますが、先ほど説明したご意見としまして、開かれた学校づくり協議会からいただいた部分であります「自己効力感」を「自己肯定感」という文言に置きかえましたり、また、吹き出しの2番目、他人の幸福まで実現する必要性の有無という点で、「自他の幸福」を「自身の幸福」という文言に変更させていただいています。また、貧困の連鎖を断ち切る教育の部分に寄せられた意見の「社会・情報からの孤立」という文言を勘案しまして、上から4行目の線が引いてある部分で、「厳しい環境にある子どもたちを孤立させることなく」という文言を加えさせていただきました。また、左側の部分になりますけれども、それぞれのライフステージごとの柱では、青少年期に文言を加えさせていただきまして、文章の3行目、「基本的な知識やそれを活用できる思考力」の次に、意見の中の「思いやりの心やコミュニケーション能力」という形で言葉を加えさせていただきました。

資料3でございますけれども、大綱理念実現に向けた施策体系というところで、左側の施策方針に、いただいたご意見を勘案いたしまして、文言を加えさせていただいております。例えば乳幼児期の1つ目でございますが、「幼児教育の推進」に、さらに「および」とつなげまして、「家庭教育の支援」ですとか、2つ目の「基本的な生活習慣の定着」という項目につきましては、文言を若干幅広く表現して、「子どもの健やかな発育に向けた取組みの推進」という形で、いただいた意見をできる限り加えて修正をさせていただいています。

ここからは1つ提案でございますが、これまで教育大綱（案）を策定するに当たりまして、資料2の部分と資料3の左側の部分を1枚のリーフレットのような形で作成していく予定で文言の整理をしておりましたけれども、これはご審議いただきたいと思います。今後の大綱以降の計画づくりという中で、資料3の右側に1つ案を、計画の体系図をつくらせていただいております。今、基本計画を策定しておりますけれども、今後、教育施策の計画や事業を組み立てていく中では、教育大綱の理念を基本計画の柱立ての該当する部分に反映させた上で、教育部門の、ないしは区長部局の中で、関連する計画づくりにこの理念を盛り込んでいく考えでございました。その中で、今後理念を実現する上では、もちろん個別の計画づくりもございますけれども、1つの大きな計画に教育大綱の理念を反映させて体系化するほうがよりわかりやすいのではないかとということで、この図を作成させていただきました。そのため、この大綱をまとめる上では、「理念実現に向けた施策方針」という方針部分を大綱から計画のほうに移行いたしまして、今後は、まだ仮称でございますけれども、新・教育振興計画の中に施策方針を盛り込みながら、その下にぶら下がる計画をうまく体系化する案で

いかがでしょうかということで、この図をつくらせていただいておりますので、この辺のご議論を今日は賜われればと考えてございます。

私からの説明は以上でございます。

○近藤区長

それでは、今までも議論をいただいたわけですが、今の説明を聞きまして、何かご意見、ご感想でも結構ですが、いかがでしょうか。

○定野教育長

さっきの自己肯定感の話ですが、多分これも何回か議論されていて、たしか小川正人先生から、効力感、あるいは有用感というような言葉をいただいたと記憶しているのですが、どうぞ発言があれば。

○小川（正）委員

自己肯定感というのは、主観的なニュアンスが強いのですが、自己効力感とか自己有用感というのは、自分自身が自分を肯定するとともに、そのことが他者とか社会から認められて、そして自分が周りの者から何か承認されているというか、自分は何か社会とか周りに役立っているのだというニュアンスが入っているように思うのです。ただ、区民のほうでその辺がわかりづらいということであれば、私は、特にこだわっておりません。

それともう1つ、資料3の成人期のところで、一番最後に新しくつけ加えた「大学、企業等様々な社会資源と連携した学びや体験の場の創出」は、確かに議論の中で出てきておりました。足立区でそれぞれの団体や組織が取り組んでいることをもう少しインテグレートして、足立区の学びの場にいろいろな学習プログラム等を提供してくれるような提携をしてほしいという意見を述べ、それは区長に引き取っていただいたように思います。ただ、恐らく成人を対象とした就労支援等々もイメージされて、成人期のほうに書かれていると思うのですが、同じようなことは、小中高の例えばアクティブラーニングとか体験学習、特別活動等々においても大学、企業等々と連携したいろいろな学習プランの提供というのは該当すると思いますので、こういうものは成人期より上のほうにも記載して構わないのではないかなと。恐らく今後の新しい学習指導要領等々では、アクティブラーニングというのが出てきますので、そういう取り組みは区としても取り組んでいくと思いますので、青少年期のところにも同じようなことを記載していただければと思います。あと、「大学、企業等」でいいのですが、できればNPOあたりも少し意識して、NPOという文言を入れてもいいのかもしれない。

もう1つ、確認ですが、先ほど最後の資料3の提案のところで、新・教育振興計画は、教育

委員会が策定していた今までのものをイメージしていいのですよね。

○定野教育長

ブラッシュアップするというイメージです。

○小川（正）委員

わかりました。

○中村政策経営課長

成人期に書かれたものが青少年期にも関連するのではないかという今のご意見はそのとおりと思います。記載が十分ではなかったのですが、例えば乳幼児期に書いてある文言に星印がついている部分、例えば2つ目の「子どもの健やかな発育に向けた取組みの推進」がありますけれども、米印で記載したように、同じ項目がほかのライフステージにも影響するものをそういう記号で表記いたしましたが、そういったことは、先ほどのご意見もあわせて、複数のライフステージに関係するものはそのような表記に改めさせていただきたいと思います。

○定野教育長

今のお話にあった施策の方針というのは大綱に残るのですか。

○中村政策経営課長

事務局の案では、この文言自体を生かそうとは思いますが、大綱の冊子からは一旦は抜くという考え方でございます。

○近藤区長

ということは、大綱としては少し粗いのではないかと。この下に、次に、先ほどご説明した足立区の新・教育振興計画で具体的にぶら下がっていく事業をつけていくには、もう少しそれを細かく見ていかないと、事業はあっても、ここにはないものが出てくるのではないかとすとか、本当にバランスよく全てが網羅されているかということについてもう少し議論する必要があるのではないかなと思ったわけです。ですから、あえてもう少し大ざっぱという言い方はおかしいですけども、大きな理念のところを今回お出しして、次に教育振興計画等を積み上げていく中で、「理念に向けた施策の方針」をここで固めてしまうと、これに出ていない施策についてはどういう形で出していくのかということがあったものですから、施策の方針等も落ちがないようにもう少し細かく精査して、足すものは足していったら、さらにその下の事業を充実させていくような形で、教育委員会の中でもご議論いただいたほうがいいのかなと思ったものですから、これでもう十分網羅されているよ、これ以外につけ加える施策はないよというところまでたいていないような気がいたしまして、その点だけです。

○定野教育長

だとすると、それを先に議論してしまって、そうすれば、この議論は後でもいいわけですね。振興計画のときでいい、そういうことですね。

○近藤区長

という気がします。

それで、もう1つつけ加えさせていただくならば、資料3の右側、新・教育振興計画のイメージなのですが、本来ですと、教育振興計画というと、教育委員会のほうにぶら下がる子ども・子育て支援事業計画とか小・中学校の適正配置に向けたガイドラインとか、こちらだけが教育ビジョンとか教育振興計画ということだと思うのですが、今回はあえて教育大綱をつくり、庁内を挙げて子どもを育て上げていくのだという意識のもとに、区長部局にこれから策定を予定していますスポーツだとか文化芸術等の計画、その他の計画の中に何が入ってくるかということはこれからなのですが、それを全部セットにして、庁内オールラウンドで足立の教育振興計画という屋根の下に組み込んでいくほうが子ども施策の充実が図れるのではないかと考えて、少し拡大した振興計画という柱立て、考え方をお示ししたわけなのですが、このあたりについても、逆に区長部局のほうはもういいよ、教育委員会のこの2本だけを振興計画で考えたほうがいいのかというような議論もあれば、ここでお示しいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

もしご同意いただけるようでしたら、全体を新・教育振興計画という大きなくくりで、その中に、名称はこれからですが、事業計画、それぞれの分野別の計画をぶら下げていくという考え方でよろしいですか。

（「はい」との声あり）

○近藤区長

では、これはそういう形でご了承いただいたということでございます。

そして、施策についてですが、これから子ども・子育て担当の部のほうで、施策の方針についても、落ちがないのか、こういった切り口でいいのかというところをご議論いただいて、精査していただいたほうがいいのかと。じっくり時間をかけて施策の方向性を探り、その下にぶら下がっていく具体的な事業計画についても、現行のもの、または新しく策定するもの等が出てくるとしますので、そこはそれぞれ専門の担当の方に、時間をかけてもう少し精査して、精緻なものをつくっていただいたほうがよろしいのではないかと事務局としては案として考えているわけですが、それについてはいかがでございましょうか。

(「はい」との声あり)

○近藤区長

では、もう少し内容、文面は精査いたしますけれども、教育大綱としては、理念として、この2つ、そして、乳幼児期、青少年期、成人期という基本的な考え方だけを教育大綱ということでお示しする、そして、それをもとに、これから振興計画の中で、施策に関わる事業を詰めていくということでまとめさせていただきたいと思います。よろしいですか。

○定野教育長

もう1個だけいいですか。この大綱の中のさっき発言があったところで、「自身の幸福の実現」とその次にあるじゃないですか。これはたしか花岡先生から、自身だけでなく、他人の幸福まで実現するというふうに入れようねという話があったような気がするのですが、そのところを1つ。

○花岡委員

必要性の有無といえ、私は必要だと思います。この文面からいくと、その後、「次世代の子どもたちの成長を促す力として活用される環境を生み出すことも重要です」とあり、「他」につながっていくのではないかなと読み取れます。「自他」の「他」という文言はなくなりましたが、同じ意味のことを伝えていると思います。

「他」というのは、いじめの問題だとか、コミュニケーション、それから思いやりの心、等々、自他ということに関連しているだろうという思いもあります。「他」にはいろいろな意味が含まれているということ理解しておくべきだと思いますが。「他」の文言は抜くということはよろしいかと思います。

○定野教育長

大丈夫ですか。ありがとうございます。

○中村政策経営課長

では、今いただいたご意見を踏まえまして、この大綱につきましては、パブリックコメントにかける形式にかえさせていただきまして、次回、ご提出させていただきたいと思います。

○近藤区長

それと、改めて読んでみると、青少年期についてのコメントなのですが、同じようなことが言葉をかえて重複しているのかなという思いもするのです。それと、「生活環境に左右されることなく」、これがまさに貧困対策で、ここのところはいいいとして、「機会を平等に提供していきます」は、趣旨はわかりますし、そうしていきたいとは思いますが、本当に機会を平等に提供し

ていけるのか。これはちょっと行政の傲慢な言い方ではないかなと。こちらはそう思っている、本当に経済格差を全て払拭して、全く同じ機会を提供できるのか。そうすると、では、機会の平等とは何か。ちょっと言葉としてひっかかる。もちろん子どもの貧困対策をやっていくわけですから、変に誤解をされ、後ろ向きだとか、やる気がないのだということではなくて、少し誤解を生じかねないのかなという気がするのです。そしてまた、次に、「考え、課題を克服し」云々ということが出てきているので、同じことを繰り返し言っているのかなということ。今回、子どもの貧困のほうで既に貧困とは何かですとか、まとめたものが出ていますので、その辺の言葉を少し引用したほうがいいのかという気がするのですけれども、橋本さん、これはどうですか。

○橋本福祉部長

先ほどの機会の平等と区長が言われているところは、本当に言い切ることまでできるのかなと、私も区長の疑問にはそういうふうに思います。「機会を平等に提供する区を目指します」くらいのかなと思ったりもするのです。本当にここまで言い切れるかということになると疑問だなと思うのです。

あと1つだけ、少し気になることで、全体で見たときに、障がいを持っている子どもとか、発達障がいとか、知的障がいとか、そこら辺に関してあまり感じないので、少しそういう部分も入れ込んでおく必要があるのではないのかなと思ったりします。

○近藤区長

先生方はいかがですか。確かにそうなのです。弱者の視点というか。もちろん生活困窮も1つなのですけれども、それ以外に障がいということは、コメントとしてここに載っていないわけです。ですから、それを1つの施策の柱として次の中で落とし込んでいくのか、この中にもきちっとそういった文言を入れ込んでいくかということは少し考えていく必要があるかと思います。

○橋本福祉部長

乳幼児期の「子どもの健やかな発育」というところに少し込められているのかなという気はするのですけれども、これは一般論でもそうなので、もう少し何か特出しするようなところがあってほしいなと思います。

○近藤区長

わかりました。では、それを少し事務局で用意していただいて。

○定野教育長

一番最初のところに「貧困の連鎖を断ち切る教育」とあるわけですが、教育というと、小中学校、幼稚園とかがあるわけですが、青少年期に「小・中・高の連携による切れ目のない教育環境の

整備」とあるのが大綱から切り離されてしまうので、この部分を何とかこの辺に載せておきたいなと。幼、保、小、中、高までの連携で、それが教育なのだとすることを少し強目に出したいと思うのですけれども、いかがでしょうか。

○近藤区長

今日午前中、高校の中退者の未然防止のための協議会で、区内の中学校の代表の校長先生と都立高校の校長先生にも来ていただいて、お話をいただいたのです。すごく印象に残りましたのは、中学校の校長先生が、かつては小学校のほうは、自分たちは卒業させてしまえば、それでおしまいだということで、きちっと連携が図られていたか、つまり、情報共有が図られていたかといえば、そうでもない。ここに来て、区が中心になって、小中連携という形の中で事業をいろいろ行ってきて、積み上がってきた上に、今きちっとした情報共有が図られることによって、意味のある連携ができてきたというお話がありました。小学校6年と中学校3年の9年間の連携、そこにこれから高校3年間を入れた12年間を足立の1つのスパンとして、12年間きちっと育て上げるための連携という意識を持つことが重要だというコメントをいただいて、本当にそのとおりだなと思いました。

ですから、そういったところも入れながら、実際にどのように中学校と高等学校の連携を図っていくか、情報共有を図っていくかという具体的なご提案もいただいておりますので、これを私どもの姿勢ばかりでなく、東京都にもこういった姿勢を持って明らかにしていただくという必要があるかと思います。区としても12年教育というか、もちろんそれに幼稚園、保育園が入ってくるわけですから、そうした認識を、「貧困の連鎖を断ち切る教育」の中に1つ入れ込んでおくと、そういった中退防止の考え方も生きてくるのかなと思うのですけれども、そういう形でよろしいですか。

（「はい」との声あり）

○近藤区長

あとは、今いくつかこちらのほうでも提案をさせていただいたり、文言について委員からご発言があったりいたしましたので、修正等が必要になった場合については、どのようにお互いに情報共有してまいりますか。事務局からお願いします。

○中村政策経営課長

今のご意見を踏まえて、修正を加えたものを次の会議までに若干調整を、教育委員会に事前にお示しするなどしまして、文言の確定作業を次回までにやらさせていただきますので、それでよろしいでしょうか。

○近藤区長

それと、福祉部長からは、障がいを持った云々というコメントが出ました。それぞれこれから施

策づくりに入っていくわけなので、この場で例えば学校教育ですとか、子ども家庭ですとか、あと、就労支援等、キャリア教育等を担当している産業のほうも何かコメントはないでしょうか。この場で発言していただいて、それをもとに、文言整理に反映させていただければと思いますけれども、それぞれの部長に一言ずつコメントをいただければと思います。

○宮本学校教育部長

これから検討しようとしている区全体の基本計画と教育振興計画がうまくリンクしていくというか、整合性をとっていくというか、その辺を考えながら、各所管のほうで事業体系、施策体系をまとめていかなければいけない。要は、後々、基本計画にも相当影響していくのだということは共通認識を持ちながらやっていく必要があるのかなと思っております。

○伊藤子ども家庭部長

私は、青少年期に力を入れていくべきだと思うのは、足立区の特性として、自分の目標となるような大人が身の回りにいない子たちが存在するということがあります。特に地域だとか社会活動を通じて、さまざまな大人と触れ合っていき、それをプロトタイプとして認識して、自分の自己形成に役立てていくという視点が必要なんじゃないかと思っております。若干ここで触れておりますので十分かと思いますが、ここに力点を置いていくのは青少年期としては大きな意味合いがあると思っています。

○井元地域のちから推進部長

今のお話の続きにもなりますが、青少年期、あるいは成人期で、さまざまな教育の機会、体験の機会を通じて、いろいろな人がいろいろな人とつながっていくということで、青少年期では、多様な人々と関わるができる環境、成人期については、ほとんどうちの部の事業がそのまま書かれていて、非常に責任が重いということを痛感いたします。前回ですか、前々回ですか、親を教育しなきゃいけないと。ただ、親の教育というのは非常に難しいので、そうすると、多様な人々と関わって親以外の大人を知ることとは、その子のその後の人生にとって非常に大きな意味を持つと思うので、スポーツだったり、文化だったり、さまざまな場面で、そういう関わりを持てる環境というものをさまざまな事業計画の中で表現していきたいと思っています。

○石居産業経済部長

先ほど区長のお話ありがとうございましたけれども、今日午前中、中高の連携の話がございました。その中でも、キャリア教育という話がございまして、話が長くなって恐縮なのですが、私は前に、ハローワークですとか、わかハロの方々とお話ししたときに、そもそも子どもたちの忍耐力ですとか計算能力といったところに大きな課題があって、事業者としても、入ってもらうのはいいのだけ

れども、すぐにやめちゃうよというような課題もあるというお話も伺っています。ですので、成人期、あるいは青少年期のキャリア教育と、それから連携して創出した学びや体験の場自体が、ただ行けばいいというものではなくて、実際に仕事をするということのは、本当は難しいことなのだよというような体験を中高の中でも、そういう視点も入れてやっていく必要があるだろうなど。産業経済部としても、そういった視点で応援をするような形で整えていきたいと考えています。

○永井生涯学習振興公社事務局長

私は、今回の体系の中で、新・教育振興計画、現在の教育ビジョンがしっかりと横つなぎのプランとして位置づけられるということはとてもよかったなと思っております。公社もさまざまな歴史がございますけれども、文化、スポーツ、そして学び、子ども支援が一体になって1つの体系を整えていくということが非常に重要だと思います。ただ、非常に重たい課題としては、家庭教育についてのプランなりビジョンなりをどのようにつくっていくのか、あるいは、それもまた横つなぎで置いておくべき課題ではないのかということを考えながら拝見しておりました。

○山本教育次長

私は、これは教育大綱でございますので、学校だけではないのですけれども、学校側がマニフェストとして毎年作成している教育課程の中にどういうふうに落とし込めていけるのかなということに関心を持ちながら見えています。いずれも、できているけれどもまだ十分ではないというような、これから向上させていく目標に読み取れますので、これを読んだときに、それぞれの学校のそれぞれ教育課程の中に、足立区の教育大綱、理念をしっかりと落とし込んでいける内容だなと感じています。

○近藤区長

ありがとうございます。

それでは、教育大綱についてのご発言は以上でよろしいでしょうか。

（「はい」との声あり）

2. 足立区学力調査における中学校の学力分析について

○近藤区長

それでは、議事の2でございますが、足立区学力調査における中学校の学力分析についてに入らせていただきます。

これについては、教育委員会から資料をいただいておりますので、まず教育長から資料の内容についてご説明をお願いします。

○定野教育長

では、資料4をお願いしたいと思います。足立区学力調査における中学校の学力分析のご報告をさせていただきます。

1ページをご覧ください。下が平成26年度、上が平成27年度の平均正答率を比較したものです。全国との差がマイナスのものについては網がかかってグレーになっています。見ていただきますと、平成26年度、全国のマイナスだったところが改善されている状況もわかっていただけたと思いますが、まだまだ中学2年生の数学、英語、中3の、国語はマイナス0.2でぎりぎりのところですが、英語、この辺に課題があるということが言えると思います。これは4月にテストをやるので、中1というのは小学校の結果と読み取れるのですが、中2、中3については、やはり中学校の対策を打っていかねばいけないと読み取れると思います。

2ページが平成27年度、3ページが平成26年度の正答率の度数分布です。大体山型になるのですが、そうでないところがありますし、また、学年を追うごとに山が潰れていくというか、裾野が広がってしまう。要するに、中位層、下位層が増えていると読み取れます。これは東京都もそういうふうに分析をしております、傾向的には同じなのかなということが言えます。

続いて、4ページをご覧ください。中学1年生、2年生、3年生の国語で、これは観点別平均正答率と言って、問題を分類して、国語への関心度、あるいは話す能力、書く能力、読む能力、そして言語についての知識など、観点別に整理したものです。平成25年度、平成26年度、平成27年度と並べてありますけれども、ご覧のように、言語についての知識、理解などは、改善されている部分もありますけれども、劣っているところもあるということです。特に1年生、2年生、3年生で共通しているというところも読み取れると思います。

5ページが数学です。数学については、グレーになっているところがだんだん少なくなっているというのがわかっていただけたと思います。というように、数学については、平成25年度、平成26年度、平成27年度を比べていくと好転していることが読み取れます。要するに、中身についてはそうなっているということが読み取れます。

それから、英語については、グレーのところが変わっていない状況を読み取っていただけたと思います。これは1年生はありませんので、2年生、3年生の状況が読み取れると思います。

6ページについては、中学の通過率です。目標のここまでというところに達しているかどうかという通過率を表にしたものです。これについても、どのような状況なのかというのがわかっていただけたと思うのですが、これは全体像を把握したわけですが、7ページになりますと、これを学校別に分類しています。通過率を10%区分で、例えば70%から80%、60%から70%というよう

に、37の学校を分類してみました。これを見ていただくと、グレーのところは減ったところなのですが、平成26年度と比較して、上位の学校が減り、下位の学校が減っているのはとてもいいのですが、そういう状況になっています。それを数字にあらわしたのが下にある箱ですけれども、これを見ていただくと、一番下のほうで、10%から20%のところにあった学校は少し改善が見られるのですが、逆に上のほうの学校も減っています。さっき全体像でもお話ししましたがけれども、中位・下位層がどうなっているのかというところは、上位層が減って、中位層は増えている。下位層のぎりぎり厳しいところは何とかフォローができていますようですが、まだまだこの辺に対策が必要だと読み取れます。

8ページは、就学援助認定率と学力との相関をとっています。左が平成26年度で、右が平成27年度ですけれども、小学校が上です。小学校は、そこに相関係数がありますけれども、マイナス0.36からマイナス0.31と改善されている。0.3を切って0.2ぐらいになると、ほとんど相関がないということで、やや弱い相関がありますけれども、改善されていることも読み取れます。ところが、中学校を見ていただきますと0.72で、四捨五入すると平成27年度も0.72ですから変わらないということと、ご覧になっておわかりのように、相関係数が0.7というのはかなり高い相関があるということで、これは明らかに、小学校は改善され、また、相関もなくなりつつあるけれども、中学校では依然として相関が高いということです。中学校は、ご存じのように、学力の高い、あるいは経済力のある子どもたちが16%私学へ抜けますので、そういった影響もあって、厳しさは大きくなっているということが言えると思います。

9ページは、平成19年度から平成27年度までを並べてみました。例えば中学校3年生の国語Aを見ますと、まだまだ国との差があります。もちろん都との差もありますけれども、国との差を見ていただくと、平成19年度のマイナス3.8からマイナス2.2というように、中学校も中を見ていただくと、徐々にではありますけれども改善されつつあるということがわかっていただけます。国語Bについても同じです。ただ、Bのほうが差が大きいというのはわかっていただけたと思います。Aは知識、Bは活用力です。

次の10ページは、数学A、Bです。数学Aを見ていただくと、かなり開いていた平成19年度から比べると、マイナス2.8ですから、少しずつですけれども上昇しつつあるということです。それから、数学Bについても同じです。ですから、先ほど話した相関がある、上位層が減って、中位層、下位層が増えているということの中身を分析してみると、少しずつではあるけれども、中学校も伸びてきているということが読み取れます。ただ、まだまだ国との差がこれだけあるということは大きな課題だと考えています。

理科については、前回は抽出校だったので比較することはできないので、数字だけ載せてごさいますけれども、理科離れが進んでいるというのは、東京都、あるいは国の分析でも明らかになっています。

私からは以上です。ありがとうございました。

○近藤区長

教育長から報告をいただきました。教育委員の先生方には何かご感想なりご意見なりをいただければと思いますが、いかがでございましょうか。

花岡委員は、かつて中学校の現場にいらしてますが、今の状況についてどうお考えでしょうか。

○花岡委員

小学校は向上が著しいのですが、中学はいま一歩という感じは持っています。いろいろな施策を打っていただいて、小学校が上がってきた、中学校も徐々に向上しつつあるのかなと思います。今年度から配置されている教科指導専門員のいる学校を訪問したことがあるのですが、大分教員の意識が変わってきているということも聞いています。漢方薬と同じで、すぐに結果は出ないけれども、3年ないし5年続けていくなれば必ず上がっていくだろうと思います。結論的に言うと、学力の向上というのは教師の指導力の問題が大きい。小学校で楽しく英語等をやっていますが、中学になると、受験体制と言っていいかわかりませんが、高校受験のための教え方になってしまうと生徒は、楽しくなくなる。そうなると、興味関心が薄れて、学習する意欲が薄れる、成績が伸びないということもあり得る。これは全部ではないのですけれども、そういう話も聞きました。

それから、算数と数学については、小学校は反復練習というか、数字の計算、四則等を何回も繰り返しやっていけば向上していきます。中学になると、今度は思考力、考えるということが必要になるので、いま一歩厳しいのかなと思われます。ある教科指導専門員の先生が言われていたのは、教師の意識が足立区は若干違うだろうと。というのは、授業をしていて、問題が「わかること」と「できること」は違うということの意識が薄い。例として、授業をきちんと受ける。例えば体育等では、「走る」、それから水泳もそうですが、教室の中でVTR、ビデオを見て、手の動かし方、足の動かし方はこうするんだということは生徒はわかるけれども、実際にプールに入って、手の動かし方、足の動かし方をやっても、それがすぐにうまくいかない。どうやればいいのか考え、その練習を何回も何回も積み重ねていくことが大事だろう。そこで自分で会得するのではないか。ということは、授業でも小テスト・まとめテスト、それから単元テストはやっているのですが、実践の積み重ね、思考力を高めることをもっとしないと成績も上がってこないのではないか、そういう意識が教員の中で薄れているのかなという話をされていました。これが全部だとは思いませんけれども、そういう

意味では、今まで打ってきた施策、取り組みは、足立区についてはすばらしいものがある、若干でも向上しつつあるということで、見通しは明るいのではないかなと、課題を克服して上がっていくという望みは高いのではないかなと私は思っています。学校の現場の中の意識が徐々に変わってきていると思いますので、もう少し機会を見ていきたいし、今の施策をきちんと取り組んでいくことが重要だろうと思っています。

○近藤区長

ほかに何かございますか。

○小川（正）委員

まだちょっとこの数値を分析できていないのですけれども、確かに数値的に見ると、着実に改善しているというのは読み取れるし、特に4ページ、5ページの足立区の学力の経年別、平成25年度、平成26年度、平成27年度の変化を見ると、特に数学とか国語は変化が見えています。ただ、やっぱり英語はグレーのところあまり変わらず、グレーの中に入っている数字は、改善されているところ、改善されていないところ、かなりばらばらです。特に英語については、まだ数年先ですけれども、次期の学習指導要領改訂では、小学校3年、4年では外国語活動をやって、5年、6年は正規の教科として入りますが、今の体制のままで、いわゆる学級担任が基本的に教科を担当するというのが今の考え方なのですけれども、足立区の場合には、若い先生方がかなり多いという中で、学級担任に教科としての英語を小学校5年、6年からやらせていくことについてはかなり不安があります。まだ時間がありますので、教科化になったときの体制は今から少し考えておいたほうがいいのかと考えます。

例えば、小中連携で、中学の先生を小学校に入れるとか、あと、小学校高学年の英語の場合には、ちょっと難しいのでしょうけれども、英語の教科担任制とか、いろいろな方策はあると思うので、少しその辺は検討しておいたほうがいいのかと思います。

あと、小学校から中学校に進学する場合、16%は私学に行くのですか。その数字がやはりもろに出ていているという印象ですね。

もう1つは、小学校の場合には、いろいろなドリルとかで基本的な学習を子どもに何度も繰り返させるということで基礎的な力が伸びると思うのですが、中学校の場合には、小学校と同じような学習方法を強いても、恐らく、素直に先生の言うことを聞いて、そういう基礎基本の繰り返しをやるというのは、中学生の意識を考えると、かなり難しいと思うのです。基礎基本の定着を進めていくにも、中学校の場合には、小学校とは違う手法を考えていく必要があると思います。それには、やはり体験とか活用、探究というものをもう少し各学校単位で進めながら、そういう体験とか活用、

探究の中で基礎基本の定着を図っていくような授業展開とかカリキュラムをもう少しきめ細かく考えていくほうがいいのではないかと考えています。

今、活用の研究は、小学校でも研究指定校をやり始めていますが、中学校の場合にはまだ1校でしょう。30ぐらいある中学校で1校というのは余りにも少な過ぎるので、少し今言ったことを含めて、拠点となるような研究開発校を中学校はもう少し増やして取り組んでいければと思っています。

○近藤区長

最後のところですが、中学校で研究の学校が増えないというのは何か理由があるのですか。

○浮津教育指導室長

小学校が5校で、中学校はまだスタートしていません。

○近藤区長

なかなか連鎖を断ち切れる状況にまで至っていないということを考えると、中学校でもぜひやっていただく必要があるのかもしれませんが。来年度はどうなるのですか。来年度も予定なしですか。

○浮津教育指導室長

まず、小学校の基礎学力の定着が割と進んできましたので、そういう観点、土壌で活用力5校ということですので、まず小学校のほうで活用力のガイドラインみたいなものをつくっていくので、それを中学校に広めていくという流れで、まだ中学校のほうは活用力のモデル校の設置は来年は考えていないところです。

○近藤区長

基礎力がついてきているところまで行ってない、次のステップに上がるという機運がまだないということですかね。

○定野教育長

応用力云々と言っても、やっぱり本当の基本的なところもきちっとやっておかないといけないと思うのです。そういった意味で、実は数学については中学校は結構改善が見られているのです。私は、これまでのやってきたことが着実に実を結んできているのだろうと思います。夏の合宿もそうだし、補習講座もそうですし、はばたきは上の子たちですけれども、そういうことをやってきている。各校の補習についても、かなり力を入れてきてやっている。ただ、それはかなり数学に特化したものがあるので、次はやっぱり英語だろうと。5年後のオリンピックを目指しても、やっぱり英語は楽しいよねと思わせないといけないわけで、今、中学2年からの数字しかないわけですが、1年生のうちにつまづいてしまう。なので、これを回避するために、今年度、モデル校でテスト

を実施して、それから補習講座を組んでいこうと考えているのですけれども、そういったことを組み合わせていって、学ぶのが楽しいなという子どもたちを増やしていくことが私は重要だと思うので、学校だけでできないこともぜひ教育委員会として力を注いであげたいと思います。次は英語だろうと思います。

○近藤区長

英語は、理科系に進むにしても、文系に進むにしても、どちらにしても大学受験では必要ですから、ここでハンデを負ってしまうと、将来ずっと響いてしまうと思います。また、東京都が言うにも、英検2級を持っていることがオリンピックのボランティアの必須だと言っていますので、少なくともそこまで英語力がついていないと、本人がボランティアになりたいくてもなれないというのがございます。今教育長が言ってくださったように、オリンピックというのも1つの短期的な目標にしながら、何とか英語の力の改善に新年度予算も含めて対応していく必要があるのではないかと考えております。

○小川（清）委員

足立区のことに直接は関係ないかもしれませんが、もう既に、ある大学では、小学校の教員になる人たちに毎日英語のネイティブの方との時間を持って、4年間でほぼネイティブと同じぐらいの英語で対話がしっかりとできるぐらい成長させている大学もあります。ですから、小学校の先生は、専科じゃなくても英語ができる、それもネイティブのように使えるという先生たちがもう養成されつつあります。先ほど小川正人先生が専科じゃないと難しいかもしれないとおっしゃったのですが、専科じゃなくても大丈夫な先生たちを今もう既に育てつつありますので、とりあえず情報として。

○定野教育長

今いる先生を問題にされたのですよね。これからの先生はいいのですけれども、今いる先生をどうしようかという話ですよね。

○小川（清）委員

今いる先生はちょっと厳しいですね。

○近藤区長

それは教育委員会でも方針を議論いただいて、何らかの対策を講じる必要があるのだったら、早目に講じていく必要がありますね。

○定野教育長

あります。

○近藤区長

予算立ても含めてご議論いただければと思います。

桑原委員、何かございますか。

○桑原委員

今、英語の話題が出ていたのですけれども、国語というか、中学生ももっと読書をしたらいいのかなと思います。日本語の語彙が今の子どもたちは少ないと言われているので、各学校に新聞もたくさん入っていることですし、もっと文字を読むというか、そういったことを習慣づけさせてもらえばいいのかなと。また、そういうのを家庭でもやっていくべきだとは思っているのですけれども、あとは中学校PTA連合会ですかね。小P連のほうは、小学校各校に本をプレゼントするというのをやっていますから、中P連のほうでもそういう働きかけをしたらどうかということを私も言っていきたいなと思います。

○近藤区長

ほかに何かございますか。職員の方も含めて、今の学力テスト等の成績についてのコメントが何かございましたら。よろしいですか。

それでは、予定しておりました議事を終了いたしました。本日はまことにありがとうございました。

3. 次回の予定

○近藤区長

次回でございますが、11月19日の木曜日、午後1時から予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。